



著者 山本 雅基 氏

やまもと・まさき ●1963年生まれ。95年上智大学神学部卒業後、「NPO法人ファミリーハウス」事務局長を務める。01年看護師の妻とともに「ホームレスのためにホスピスを建てたい」と活動を開始。各地のキリスト教教会、多数のボランティアの後援を得て、02年東京・台東区の「山谷」地区に在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」（全21室21床）を開設する。

ひとつの現象から何を読み取るのか、という根元的な問題です。現象はひとつしかなくても、そこから読み取れることはさまざまなので、死生観についても、否定的なものから肯定的なものへと発想を転換させられたのです。

この町に暮らしているのは、「人生なんてどうでもいい」という人たちが少なくなく、いわば、虚無主義者として死を受容しています。これまで家族や職場から「おまえは無用だ、不要だ」といわれ続けた人たちが、「あなたは大切」といわれて、命ある存在として自分の生を肯定し始め、その延長に死をとらえ、「お葬式は死へのお誕生日」と送り出されていく。人生の終盤で、「もうちょっと生きてもいいかも」と思える状況に変えていくのが、「きぼうのいえ」の取り組むべきことなのだと思います。

ひとつしかアイスクリームを食べてはいけないと親からいわれていた子どもの頃、誰しも大人になったら10個食べよう、と思ったでしょう。私の場合、捨て犬・捨て猫を拾っては叱られていた子どもが、平均年齢64歳という人たちを迎えている、というだけなんです。本当にやりたいことに取り組んでいるので、「できないストレス」から解放されました。

今は、年間約1,000万円の赤字財政です。しかし、現代の赤ひげ先生のような医師や、国境なき医師団の派遣待機中の訪問看護師がやってきます。その高い意識が、今回私たちが立ち上げたヘルパーステーションに伝播するよう心がけています。医療・看護・介護の連携によって独居高齢者が多い地域に根付く、「利潤追求型でない事業モデル」の構築をしていくことが、これから10年間の課題です。

——ジャミックジャーナルの読者にメッセージをお願いします。

ドクターに求められているのは、共感と響きではないでしょうか。「そうですか」ではなく、「そうだよ」と応じられれば、知識量の多いドクターが自分の目線にまで降りてきてくれた、と感じられるのです。

チーム医療は、役割分担するだけでなく、情緒についても分かち合い、それをチーム全体の活力へと転化させていくことも大切です。たとえば、患者さんの否定的な感情にさらされて医療者がダメージを受けたとき、相手に対して逆上してしまうと、自分が負けてしまう。しかし、「そうきたか。なかなかやるね。じゃ、これならどうだ!」とかわしていくこともできます。一人で受け止めると感情的になりやすいことでも、チームで向き合い、否定的な攻撃をユニークな個性ととらえてユーモアにする。この発想の転換がバーンアウトを防ぐことを、私自身は身をもって知りました。そして、家族的であたたかなケアを維持するためには、専門家の協力が必要です。ドクターとともに、ケアが必要な人たちの良好な関係性を築いていきたいですね。

——どうもありがとうございました。

インタビュー・仁科典子

BOOKS

今月の「い」の1冊

——この本を出したきっかけは、何かありましたか。
「きぼうのいえ」を立ち上げて半年ほど経ってから、テレビで取り上げられ、それをきっかけに出版社から執筆の依頼がきました。開設から3ヵ月後に私が倒れてしまったところまでを核としていますが、音楽による看取り（ミュージック・サナトロジー）などを加筆して、刊行までに3年ほどかかっています。表紙は、動的な印象をも与える写真を選び、タイトルは、中華料理店で目にした「冷やし中華始めました」という貼り紙にびんときて、決めました。「脱力系」が、「きぼうのいえ」では許されると思うからです。ホスピスで人が笑っているのは、大切なことですから。——3年半の間に、37人を看取るなかで学ばれたのは、どのようなことでしょうか。

東京のドヤ街・山谷で ホスピス始めました。

「きぼうのいえ」の無謀な試み



山本 雅基 著 / 1,680円 / 実業之日本社 / 03-3535-4441